

愛知の「派遣村」に訪れたある相談者の生活史

—— 生活の解体と再組織化の視点から ——

西 川 知 亨

1 はじめに

日本は今、格差というよりも「貧困」が大きな社会問題となっている。その象徴が、2008年12月31日から年明けにかけて東京・日比谷公園で開かれた「年越し派遣村」であろう。年越し派遣村には、職や住まいを失い、「生存」が脅かされている多くの人々が、食事や寝床を求めて集まった。炊き出しの食事を受け取ったり生活相談を受けたりするために並ぶ人々の長蛇の列は、テレビなどのマスメディアで連日報道され、これが本当に経済大国日本の姿なのか、という印象を抱いた人も少なくなっただろう。2009年6月28日、東京の「派遣村」は閉村した。しかし、「派遣村」的な活動は、現在、全国各地に広がっている（宇都宮・湯浅編 2009: 35）。

厚生労働省のデータによれば、愛知県は、非正規雇用の失職者数が、全国ワースト1である。その愛知県において現在展開されている支援活動も、そのような「派遣村」的活動の一つである⁽¹⁾。愛知県の「派遣村」活動は、2009年3月2日、「愛知派遣村実行委員会」の結成によって開始される。以来、筆者はこの組織の一員として参加しながら、彼・彼女らの活動を調査している。この組織は、相談会、各所要請、交流集会など様々な活動を行っている。ここでは、司法書士、弁護士などの法律家、医師、看護師等の医療従事者など、様々な分野の専門家が、自らの専門知識を生かして、困窮する人々の支援に取り組んでいる。また、この組織には、このような専門家のみならず一般の市民も多く参加している。こうした彼・彼女らの活動に関して、社会学の立場から、その具体的な成果や社会的な影響を分析することがありえる。しかし、そこに訪れる相談者に光をあて、この組織をいわ

⁽¹⁾ 愛知県内の「派遣村」活動は、東京でおこなわれた「年越し派遣村」のように宿泊所を用意するものではないために、「派遣村」の名に値するののかという議論が、実行委員会でもおこなわれている。だが、貧困に対峙する「年越し派遣村」の理念に敬意を示すと同時に、その実践を目指すという趣旨で、実行委員会の名称としても「派遣村」という言葉を用いている。

ば媒介にして、そもそもどのような人がどういった経緯でその組織に訪れ、また、組織との出会いを通じてその人の生活がどう変わっていったかを明らかにすることも重要であろう⁽²⁾。

本稿では、愛知県内の派遣村相談会に訪れたある男性の事例を通じて、「貧困」からの脱却に何がかかわっているのかを考察する⁽³⁾。近年、困難な状況に対する適応の決め手となる資質や社会資本に対する関心が、心理学や逸脱論などの分野で高まっている。そうした資質や社会資本などを用いた「回復力」のことを「レジリエンス (resilience)」という。筆者の関心は、レジリエンスに関する知識を深めることにある。本稿の目的は、こうした研究を今後行っていくための下準備として、まずは貧困という困難な状況に陥った人が、その状況をどう認識し、どう対処したかをつぶさに記述することである⁽⁴⁾。「生活解体」とは、秩序だった生活構造・パターンが崩れることより、社会参加のための生活システムがうまく機能していない状態をあらわしている。本稿でとりあげるのは、愛知県において、「期間工」⁽⁵⁾として勤務していた大手自動車会社から「契約満了」を理由に、退職と退寮を迫られ、生活解体を経験したある50代の男性である。本稿では、この男性の生活史を詳

⁽²⁾ 筆者が馴染んできた理論的背景については、西川 (2002, 2003a, 2003b, 2003c, 2004, 2007a, 2007b, 2008a, 2008b, 2009) など。シカゴ学派の社会解体・再組織化論は、社会あるいは生活、個人がたとえ「危機」に陥っても、何らかの形で立て直しを図ろうとする社会的コントロール研究であると解釈しうる。初期シカゴ学派をリードした一人であるE・W・バージュスの「解体が再組織化を志向し、より有効な調整作用を営むかぎりにおいては、解体は病理的なものとしてではなく、むしろ正常なものとして考えなくてはならない」という有名なフレーズは、そこに内在する社会病理学的側面を批判的にとらえる必要はあるものの、社会生活が解体状態から再組織化へと志向するための視点として、参照・活用されてしかるべきだろう (Burgess [1925]1967: 54=1972: 56)。社会解体と個人解体、あるいは生活解体の関係性については、内外における一連の『ポーランド農民』研究が扱っている。たとえば、宝月 (2000) などを参照。

⁽³⁾ 「派遣村」活動では、たとえば、相談者が次の日にはスタッフとなる、あるいは相談員を含むスタッフと懇親会を共にする、などといったことが見られるなど、相談者と相談に応じる者との間に明確な「線引き」がなされていない。誰も「貧困」状況に追い込まれる可能性がある、という意識が、相談に応じる者たちの間で共有されているように見える。

⁽⁴⁾ 菅原 (仮名: 後述) が派遣村活動における交流集会のなかで語った内容を、本人が原稿化したものをもとにして、筆者が本人の生活史リストを作成した。そのリストを事前に菅原に郵送し、2009年9月2日のインタビューを迎えた。これに似た方法は、ショウやサザランドをはじめとしたシカゴ学派の生活史法の研究者によってもなされている (Shaw[1930]1966; Conwell and Sutherland 1937)。

インタビューは、現在の菅原の生活圏内にある公共機関と、その近隣のX公園で行われた。インタビューにおける聞き手は、大山小夜 (金城学院大学) と筆者である。インタビュー時、菅原をよく知る、「派遣村」活動のメンバー2名が、全インタビュー時間の5分の1程度、同席していた。筆者は、時折、その2名にも、インタビュー内容に関する意見を求めた。インタビュー時間は、約10時間であったが、そのうち、録音機で記録した時間は、6時間20分である。後日、文字におこした原稿は、菅原によって2度のチェックを受けた。

⁽⁵⁾ 「期間工」(季節工) と言えば、自ら自動車工場に期間工として潜入し取材した鎌田の著作 (1983) がよく知られている。期間工が直接雇用であるのに対して、現在特に問題となっている「派遣」労働は、雇用責任が曖昧になりがちな「間接雇用」であり、自動車工場においては期間工よりもさらに劣悪な労働条件であることが指摘できる。

述し、資質などの資源に注目する。これらの作業を通じて、この男性が、①生活解体以前より、どのような資質を持っているのか、②どういった状況下で自らの諸資源を失って生活解体を経験し、また、③手持ちの資質や資本などを再編しながら活用して生活をどう再組織化していくのかを明らかにする。その結果として本稿で明らかとなるのは、くさまざまな資源を失ったり、その有効性が減退したなかで生活解体が起こっても、ある種の資質を有していれば、生活解体の程度が軽度ですんだり、その後の生活の再組織化が容易となりうる>ということである。そして、こうした事実から逆にうかがえるのは、その背後には、こうした資質に恵まれず、社会が用意したくさまざまな安全網の穴をすりぬけて生命の危機に直面したり犯罪などの逸脱行為に走ったりする人がいる、と思われることである。生活上の危機は、外部状況の何らかの変化にともなって、それまでは外部状況に適応してきた資源の有効性が低下したり、資源そのものが失われたりすることによって起こる。このため、危機への対処には、新たな資源を外部から調達し投入することの重要性が一般に指摘されている。だが、それだけではなく、実際には、危機以前に自らの内部に蓄積され内面化されている資質も大きな役割を果たす。こうした資質が実際にその人の人生においてどのような役割を果たすのかを理解するには、その人がこれまでの人生において行ってきたくさまざまな出来事への対処の仕方と、その後、直面する危機への対処の仕方などを、一連の時間の流れのなかで具体的にみていく必要がある⁽⁶⁾。

以上、本第1章では問題設定をおこなったうえで、次の第2章では、本稿で考察するある男性が後に出会うこととなる愛知県でおこなわれている「派遣村」の中身、また、そこに訪れる人々の特徴を概観する。第3章では、この男性が生まれ故郷から愛知県へ移住する前の生活史について記述する。第4章では、愛知県における大手自動車会社勤務時代の生活の様子の叙述をおこなう。第5章では、職と住まいを失ってしまったために、ホテル生活、路上生活を強いられていた時期の生活解体について記述する。第6章では、「派遣村」と出会い、生活解体前の資質、資源、社会的資本をも合わせて活用しながら、あらたな生活の再組織化へ志向する様子について考察する。こうした考察を踏まえて、本稿の末尾では、生活解体前から有していた要素である資質が危機を最小限に抑える上でも、また生活を早期に再組織化する上でも重要な役割を占めていることを明らかにする⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

⁽⁶⁾ 本稿で用いている「資源」とは「利用しうる必要なもの」、「資質」とは「個人に帰属しうる資源」を意味する。

⁽⁷⁾ 「派遣村」活動と貧困についての論説は数を増やしてきてはいるものの、「派遣村」活動やそこに訪れる相談者に関する社会学的研究はほとんどない。その一方で、貧困研究については、一連のシカゴ学派（質的・量的な）モノグラフ研究をはじめ、内外において、膨大な蓄積がある。生活の解体、とくに貧困からの脱却に関する研究については、近年で言えば、たとえば、社会人口学的要因（Caputo 1997）、収

2 ある地方都市での「派遣村」活動——愛知県における岡崎・知立・豊橋

愛知県内の雇い止め等の状況は、とくに深刻であると言われているが、それを裏付ける次のようなデータがある。2008年10月～2009年12月の期間における、非正規労働者の雇い止め等の状況をあらわす都道府県別データである。ここで示すものは、2009年11月27日、厚生労働省によって発表されたものである。それを見ると、全国で約25万人、そのうち6割近くが派遣労働者である。また、全体の約25万人のうち、約17%は愛知県であり、41145人である。これは、ワースト2の東京の11000人を大きく引き離しており、このデータからも、愛知県内で起こっている雇用情勢の「異常さ」が際立っている（厚生労働省2009: 4）⁽⁹⁾。

（表1）非正規労働者の雇い止め等の状況（2008年10月～2009年12月）

順位	都道府県	人数計	派遣	契約(期間工等)	請負	その他
1	愛知	41145	22620	13719	3425	1381
2	東京	11000	716	4343	654	5287
3	長野	10809	7650	1390	794	975
4	三重	8981	5559	2996	262	164
5	神奈川	8610	5296	2017	100	1197

*厚生労働省（2009: 4）（11月報告速報）より作成

これらの情勢を一つの背景にして、2009年の愛知県内では、「派遣村」活動がおこなわれている。本稿執筆時、愛知県では、派遣村の名前を冠する組織が3つある。それらは、「愛知派遣村実行委員会」「知立団地一日派遣村実行委員会」「豊橋派遣村実行委員会」である。3つの実行委員会は、相談会や集会を行う際には、お互いを訪問、協力するなど、

入源の多様化（Krishna 2004）、住居の移動（Keels, Duncan, Deluca, Mendenhall and Rosenbaum 2005）、就業・失業の出来事（Callens and Croux 2009）を強調するものがある。そのなかで、本稿では、初期シカゴ学派の研究を手がかりとして、これまでの研究があまり強調しなかった生活史上の社会心理学的要因にも着目し、生活の解体以前の資質が組織化に果たす役割について着目する。

⁽⁸⁾ 本稿の意義は、第1に、今後、名称としては消えていくかもしれない「派遣村」活動とそこにかかわる人々の経験に焦点を合わせている点にある。第2に、実態としてあまり明らかとなっていない、現代日本において「貧困」に陥る人の生活の解体と再組織化の過程を詳細に描いている点にある。第3に、生活の組織化が比較的容易であったと考えられる事例を取りあげることで、社会的コントロール・組織化の理論へのインプリケーションの提示を試みている点である。

⁽⁹⁾ 厚生労働省がおこなった調査では実態の一部しかとらえられておらず、実際の数はいっといとの指摘がある。

相互に連携しながら活動をしている。

各実行委員会は、各分野の専門家／非専門家のメンバーから構成されており、いずれのメンバーもボランティアである。専門家とは、弁護士、司法書士、医師、看護師、労働問題専門家、ケースワーカー経験者などである。非専門家とは、上記の専門家に該当しない市民などを指す。

実行委員会の活動内容は多岐にわたるが、活動のうちもっとも重要で象徴的なのは、「相談会」である。これまで、相談会は、3月に岡崎で「反貧困・駆け込み相談会」、4月に「知立団地一日派遣村」、5月と10月に「豊橋一日派遣村相談会」が実施されている。また、8月と11月には、これらの活動に刺激を受けて、日本司法支援センター愛知地方事務所、厚生労働省、総務省の「後援」を得て、日本弁護士連合会、愛知県弁護士会が、それぞれ愛知県刈谷市・岡崎市において「雇用と生活無料法律相談会」を実施しているが、愛知派遣村実行委員会はこれらの相談会に外部団体として「協力」した。

筆者は、愛知派遣村実行委員会の一員として、上記のうち3月－5月の計4日間行われた相談会の集計（および相談員などへの聞き取り）に協力した。具体的には、相談会では、来談者について、1ケースごとに相談票を作成する。そこで、この4日間に相談会に訪れた計297人の相談票の結果から重要な項目を抜き出して集計した。この集計結果と、相談会を通じて実行委員会のメンバーが気づいたことなどを総合することで、24項目の問題点が明らかになった。（愛知派遣村実行委員会・知立団地一日派遣村実行委員会・豊橋派遣村実行委員会 2009; 大山 2009a, 2009b）。

これらの問題点は、基本的に、「労働」「多重債務」「生活」「住まい」「健康」に整理された。＜労働＞問題の一例をあげると、「非正規労働者・外国人労働者が不安定な就労と収入の状態を強いられていること」、「派遣会社によって『不当な』控除がおこなわれていること」、「解雇とともに住まいを失いがちであること」、「企業が雇用保険の手続きをとろうとしないこと」などである。＜生活＞（生活保護）問題としては、「生活保護を申請しても、開始決定までの間、生活困窮に陥ること」、「行政が名目賃金を収入として認定してしまうこと」（実際には種々の名目で給料から差し引かれる）、「現実や本人に即した指導を福祉事務所がおこなっていないこと」、「生活保護以外の施策が利用しにくいこと」、などがその例である。＜住まい＞の問題としては、「住まいを失った人に対して、行政がアパートの情報を提示しないということ」、「行政が紹介した宿泊所が『不当な』控除をおこなっていること」、「公営住宅の不足、および生活保護制度の周知不足のために、とくに日系人において世帯が錯綜していること」（複数の世帯が共同生活を行うことを強いられている）、「緊急宿泊施設が不足していること」、などである。また、＜健康＞問題としては、

「相談者の心身疾患に対して適切な治療が受けられていないため、うつ病や自殺リスクが高まっているということ」が挙げられる⁽¹⁰⁾。

3 相談者の生活史から見る生活解体と再組織化——家族環境など

3-1 相談者であるインフォーマントについて

次節以降の、相談者にかんする詳細な生活史の紹介に入る前に、本節では、この男性の生活史の概要を紹介するとともに、彼の生のプロセスを、生活解体と再組織化という視点から、4局面にわけてみておこう。この男性の名前は、菅原健（仮名）という⁽¹¹⁾。調査時の年齢は50代である。近年、非正規雇用などの労働・就労問題に関しては、特に若年者がクローズアップされがちである。このため、愛知県内の派遣村相談会への来談者も若者が多いというイメージを持つ人が多いと思われる。しかし、来談者は、必ずしも若年者ばかりというわけではない。先の岡崎・知立・豊橋の3回の相談会における相談者の年齢層は、20代から70代までと幅広く、平均年齢は、男性45.4歳、女性40.4歳であり、したがって、菅原は、愛知派遣村の来談者のなかでは平均よりやや年長ということになる。

菅原と筆者とは、愛知県内における「派遣村」活動を通じて知り合った。筆者は、2009年3月より、愛知の派遣村活動に参加しながら調査をおこなっているが、菅原のことを知ったのは、2009年5月であり、実際にお互いの名前を知って会話や私信を交わすようになったのは、2009年8月からである。

菅原は、関西の出身であるが、派遣村相談会に来る前は、愛知県にある大手自動車会社で「期間工」として働いていた。それ以前より、菅原は、この会社との間で、契約の更新を継続してきた。だが、2008年10月中旬、事前に会社側から出されていた契約の延長の打診を一方的に撤回される。そして、このことにともなって、退社規則にのっとって、退社後3日以内に、会社が提供していた寮を出ることになった。その後は、手持ちの所持金で

⁽¹⁰⁾ 筆者ら（大山小夜・近藤敬子・筆者）がおこなったこれらの集計結果を一部として、実行委員会は、資料を作成した。これは要請に説得力を持たせる資料として、愛知派遣村実行委員会のメンバーによって活用された。具体的に、各メディア関係者を集めた記者会見、「派遣村」全国シンポジウム、県庁産業労働部就業促進課若年者・地域雇用対策グループ分室などへの聞き取り、愛知派遣村交流集会での基調報告（大山 2009b）、全国クレジット・サラ金・商工ローン・ヤミ金被害者交流集会分科会報告、愛知県各市町村福祉事務所への要請などの際の資料として用いられている。

⁽¹¹⁾ 本人は、交流集会で体験談を語っているが、その内容を後日、原稿記録として残すことが実行委員会のメンバーによって提案された。本人は実名でもかまわないと述べたが、その後、メンバーとのやりとりのなかで、「ハンサム」な「菅原文太」「高倉健」の名前をあわせた「菅原健」を使用することを本人が提案した。

ビジネスホテルに宿泊し、ハローワークや就職情報誌を使って就職活動をしていたが、就職が決まることはなかった。そのうち、所持金も使い果たし、宿泊施設に泊まることもできなくなり、路上生活を強いられるようになる。

菅原は派遣村相談会には、相談をする立場として訪れた。だが、調査時は、相談会を経て、生活保護を受け、愛知県内の派遣村実行委員会のメンバーの一員として相談に応じる活動もしている。

以上の彼の経緯を、本稿の関心の1つである生活の解体と再組織化という視点からみた場合、どのようにとらえることができるだろうか。彼の場合、最大の生活の解体の時期は、「期間工」という非正規雇用の契約満了とともに、職も住まいも失い、さらに路上生活を強いられた時である。このように、仕事とともに住まいを失い、路上に放り出される事例は、菅原だけでなく多くの事例で見られる。その一方で、菅原の場合は、生活の解体の期間や程度が比較的浅くてすんだこと、また、その後の再組織化も円滑に進んだケースともいえる。そのことの理由の1つとして、人なつっこさ、ユーモアの精神、律儀さ、といった彼個人に帰属しうる資源、すなわち彼の資質が様々な場面においてプラスに働いていたということが、生活史から浮き彫りになる。そのほかの資質としては、たとえば長時間のインタビューにおいて、この種の調査や労働問題について無知なインタビュアー（筆者）に対して、話題が途切れることなく、自分の生活史をわかりやすく整理して説明することのできる知性も含まれる。

このように、菅原の事例は、典型的な現代の労働・貧困問題が見られる一方で、生活を組織化する際に用いられる資源面では、おそらくは他の多くの、派遣村にたどり着くことのできない人々と異なる資質を持つ。この資質が、結果的に彼の生活の解体の程度を軽減し、また、その後、早期の再組織化を可能にしている。本節の最後に、菅原の生活史を年表にしておく（表2）。

(表2) 菅原の生活解体と組織化に関する生活史

年（居住地）	生活の組織・秩序など	地位・できごとなど
1950年代 ～2007年11月 (関西地方)	<u>I 関西地方での生活期</u> (定位家族・生殖家族・労働生活のもとでの生活秩序)	・誕生 ・小学校入学・卒業 ・中学校入学・卒業 ・高校入学・卒業 ・短大入学・卒業 ・D社への就職 ・E社への出向 ・結婚・3人の子の誕生 ・離婚 ・父親の介護、死別、D社退職
2007年11月～ 2008年10月 (愛知県Z市)	<u>II 大手自動車会社勤務期</u> (新たな生活の組織化)	・大手自動車会社の期間工勤務 ・「契約満了」を理由とした退職勧告
2008年10月～ 2008年5月 (愛知県Z市)	<u>III 仕事・住居喪失期</u> (生活の解体)	・ビジネスホテルやネットカフェでの生活 ・X公園などでの路上生活
2009年5月～ (愛知県Z市)	<u>IV 派遣村活動への参画期</u> (生活の再組織化)	・「派遣村相談会」で相談 ・生活保護の受給 ・派遣村実行委員会のスタッフとなり、活動参画

3-2 愛知県への移住以前——関西地方での生活

3-2-1 定位家族の環境

菅原健は、関西地方のある街において、6人兄弟の5番目の子としてこの世に生を受ける。兄弟は、一番上と一番下の2人が女性（姉と妹）であり、あいだの3人は男性（兄）である。

菅原の父親（1910年代生まれ）は北海道網走市番外地で育った。家はかなり貧しく、菅原は、父親が中学校を卒業しているかどうか分からないという。元号が大正から昭和に変わった頃、関西の親戚の家に、一家で身を寄せる。ただし、菅原は、この親戚に会ったことがない。ちなみに、菅原は、この父方の祖父母にも会ったことがない。父親は、関西では鉄工所に勤務していた。経営者になることが夢だった。しかし、菅原によれば生来の

「お人好し」であり、その夢が実現することはなかった。性格はまじめで、気が弱く、いつもニコニコしていたという。借金もあったようだという。しかし、菅原によれば、「おやじについて、それ以上詳しいことは、よく知らない」。2006年、老衰で亡くなる。

菅原の母親は、1910年代に関西で生まれ、本稿執筆時も健在である。庄屋の裕福な家庭に育った。母親の父親、つまり菅原の祖父はかなり教育熱心であり、「女にも教養が必要である」と考えていた。実際、母親は女学校を経て、小学校の教員をしていた。母親の母親は、有名な教団の幹部職を務める「No. 3」であり、直系の大教会を所有しており、母親にはいつもお供の人がついてた。教会には、中心に付属のプールがあるほどの豪華さであった。

この母親は、気が強いしっかり者であり、働き者であった。彼女が菅原に「肝に銘じておけ」と何度も言っていることが2つある。第1に、「太陽に背を向けて生活しないといけなようなことはするな」である。道の端っこではなくて、真ん中を堂々と歩けるような、まっとうな人間になれということである。第2に、「人間は生きている間は、死ぬまで勉強だ」ということである。筆者は、それは人生哲学みたいなものですね、と尋ねたが、人生哲学というよりも、経験のなかから編み出したものだろうと菅原は答えた。

菅原自身も含め、菅原の兄弟や親戚は国公立大学をはじめとした難関大学を出ているなど、教育を受けている者が多い。また、これらの大学を経て、有名企業に勤める者も多い。「とてもホームレスを経験した者の親戚には見えないでしょう」と菅原は述べる。菅原は、メモを見ながらも、すらすらと兄弟の経歴や人となりについて話していく。甥や姪の経歴にもよく通じていたのだが、それは入学・卒業のたびに「お祝い」を渡しているからよく覚えているのだと話す。こうした思慮深さ、几帳面さは、既述した菅原の文化資本とは別に、菅原自身に帰属する資源、すなわち菅原の資質をよくあらわしている。

3-2-2 学生時代

中学ではテニス部に所属した。県レベルで優勝したことはなかったものの、たいていベスト4、常にベスト8に入る実力の持ち主であった。このため、ある私立高校から推薦入学を誘われた。だが、菅原が選んだのは、地元の進学校である公立B高校であった。菅原は、あまり勉強をしなかった。兄たちは、「自分たちは必死になって勉強して入ったのに、なぜ勉強していない健が入れるのか」と多少の「やっかみ」の意を込めて菅原に言っていたという。姉の娘は、「お母さんが言っていたけど、きょうだいの中で、健のおじさんが、一番賢いだろうって」と話す。菅原がB高校を選んだのは、同級生で「気になる」女の子が進学すると聞いていたからである。しかし入学後、その女の子は別の公立高校に進学し

ていたことを知り愕然とする。

高校時代、菅原は、キャディーの仕事のほか、飲食店でアルバイトをした。その飲食店では、「ウェイター」⁽¹²⁾をやりたいくてアルバイトに応募した。採用が決まり、彼は、憧れのウェイターの仕事ができると期待に胸を躍らせた。だが、人手の関係から、初日に「洗い場」部門にまわされてしまい、以後、ウェイターの夢は実現しなかった。その後、調理を手がける「和食」部門にまわされる。しかし、これがだいたい後の彼の生活に大きく役立つ。現在、菅原は一人でアパート暮らしをしている。外食は高くつくため、自炊が欠かせない。菅原は、この時の和食調理の経験を活かし、自らの食事のみならず、湯谷（仮名）の「とつつあん」にも食事を提供する。「とつつあん」というのは、70代で、菅原と同じ時期にX公園で路上生活者として過ごしていた仲間である。後でも触れるが、「とつつあん」は、菅原が路上生活から抜け出した後も、かけがえのない（年上の）友人となっている。インタビュー前日にも、菅原は、とつつあんに「鰯の生姜煮」をふるまい、「酒のアテができた」と喜ばれている。

菅原は、若くして亡くなった一番上の兄を尊敬していた。そこで、兄と同じ公立のA大学経済学部に進学したいと考え、その一校のみ受験した。しかし、「世の中、そんなに甘くはなかった」。勉強をあまりしなかった菅原は不合格となった。他の4年制大学はすでに入試日程を終えており、就職することも難しかった。兄弟が多く、家計もさほど余裕があるわけではない。このため「浪人」することはできなかった。だが、菅原は、学ぶことは好きであったため、大学に何とか通いたいと思った。そこで、入試日が遅かったC短期大学夜間部に進学する。

短大時代、夜は通学し、昼は百貨店の海苔屋でアルバイトをした。短大では、メディアによく登場する有名な学者のゼミにも所属した。

在学中、菅原は、教員から地銀などの金融機関への就職を打診されていた。だが、金融機関に勤めて苦勞している姉や兄の姿を見ていたので、菅原は、自分には向いていないと考え、その話を断った。

短大卒業後、菅原が就職先として選んだのは、全国的にもよく知られている大手メーカーのD社であった。

3-2-3 大手メーカー勤務時代

⁽¹²⁾ 菅原は、ある意味で「カッコいい」憧れの仕事であることを表すために、語勢を強めながら、少々おどけて語ってみせてくれた。

菅原はD社に入社する。D社では重要な仕事を任せられ、それなりの地位にも就く。ここでの経験は、その後の、彼自身の心の「拠り所」や「誇り」となっているように思われる。

D社に入社したばかりのころの仕事は、営業職であった。そのうち技術的な仕事もしたと考えるようになる。職場では、営業職のほうが花形であった。だが、「現場」にあこがれを持っていた菅原は、身体的な危険がともなうことを承知で、営業職よりも「現場」勤務を申し出、晴れて工場に配属された。

数年後、菅原は結婚し、妻との間に2人の娘と1人の息子をもうける。長女は、地元の公立高校を卒業後、地元の銀行に勤める。後年、菅原が大手自動車会社を追われ、住居を失ったころ、長女は結婚し、同年、菅原にとって初孫が誕生している。次女は、公立高校を卒業し、現在、国立大学に通う。長男は、現在、中学生である。

結婚して間もない頃、D社の別部門であるプロジェクトが取り組まれているという話を耳にする。菅原は、自分もぜひやってみたいと志願し、家族を関西に置いて単身、関東地方のE社に5年出向する。

E社で菅原は、障害物検知装置、略して障検（ショーケン）の製作にたずさわった。障検とは、自動車や人など踏切内の障害物を自動的に検知して、その状態を列車や駅などに自動的に知らせる保安装置のことである。菅原は工場内で、障検の図面設計と制御盤組み立てなどを担当していた。

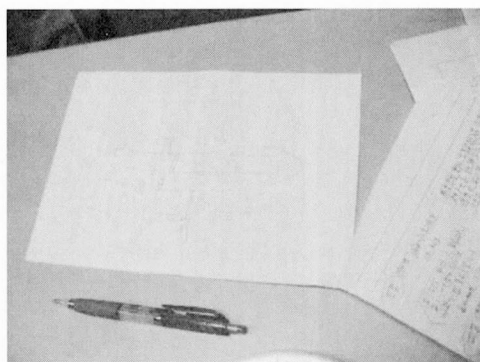
障検部門では、制御盤などの製作だけでなく、鉄道の線路付近に設置済の障検のメンテナンスもおこなっていた。障検のメンテナンスは、主に車両が走らない深夜におこなわれた。しかし、鉄道会社の都合で日中におこなわれることもあった。高速で通過する電車と接触する危険と隣り合わせの作業である。だが、作業に熱中していると、電車が近づいてきても気付かないことも多い。そこで、鉄道が近づいてくると、保線区の担当者が笛を鳴らして電車の接近を知らせた。退避場所は狭く、線路から2、3メートルしか離れていないことも多いため、とても危険である。しかも、高速で通過する電車の風圧の衝撃は強く、飛ばされたり、逆に電車の方に吸い込まれたりする危険性がある。そのため、近くの「つかまり棒」につかまって、電車をやり過ごす。

5年の出向期間を終え、関西のD社に戻ってからは、E社での経験を生かしてメンテナンス部門・検査係などを担当し、工場内で技術指導をおこなった。といっても、D社では新しい試みであるため、菅原自身も手探りの状態で、学びつつ教える、という指導法であった。障検整備の担当得意先は、関西の主たる電鉄会社と、一部JRである。菅原が製作とメンテナンスを担当していたタイプの障検の全国シェアは、E社が100%であった。そこで、親関連会社のD社が、西日本部門として、アフターサービスを担当していた。つまり、関

東のE社で製作した障検のアフターケアを、関西のD社が担当していたのである。

菅原が、D社でかかわった大きなプロジェクトがもうひとつある。それは、潜水艦の電子制御関係の仕事である。潜水艦は、浮上しているときは動力源として重油を用いる。しかし、水中では、重油は艦内の酸素は使用できないため電気を代用する。

潜水艦には、前方部と後方部に電池室があり、それぞれ120本を積んでいる。つまり、潜水艦一機あたり、240本から250本の電池を積んでいることになる。潜水時、この電池が使われるが、その際に放熱される。そのため、加熱を防ぐための冷却装置も欠かせない。菅原の仕事は、この循環パイプによる冷却装置と、そのための電力の制御装置を製作するという、重要な任務だった。菅原は、電子制御とその冷却部門の責任者という重要な任を負った。



(写真1) 潜水艦の構造

菅原は、簡単な図面を書いてくれた。

作業は、かなり慎重におこなっていた。なぜなら、大量のバッテリーを扱っており、ネジひとつでも落とすようなことでもあれば、ショートして爆発する危険性がある。また、潜水艦内で作業していると、あまりの暑さに、汗が滝のように出てくる。そこで、送風機（扇風機）を使うのだが、汗をかくと、体に、電気が走るのを感じる。つまり、強力なバッテリーから放電していることを体感しながらの作業だったのである。

菅原のかかわったプロジェクトは、軍事産業関係であったために、国家機密にかかわるものであった。そのため、防衛庁（現 防衛省）の職員も見回りに来ることも多かった。工場には、特に出入りを制限しているところがある。そのような場所でも昔は、腕章をつけていれば、入ることができたが、ある時から、ID・指紋登録制を使用するようになった。場所によっては、防衛庁と大手関連会社の社員のみが入ることができて、菅原ですら入れない場所もあった。

結局、菅原は、関東地方のE社に5年間出向したが、基本的には関西地方のD社に勤務し、2つの重要なプロジェクトにかかわっていた。菅原自身、このことを誇りに思っていた。しかし、このことは、その後の、予期せぬ路上での生活の時期において、菅原自身を、過去と現実との残酷なギャップに陥れ、苦しめる原因ともなった。

3-2-4 離婚と退職へ

そんな折、家族の状況に、変化が訪れる。20年間連れ添った妻と離婚することとなった。ただし、菅原によれば、離婚と言っても、お互いに「いがみあったり」などはしていない。「お互いにお互いのことを考えすぎたというか、あまりにも性格が同じすぎた」。妻の方は、ケアマネジャーの仕事のストレスもあったが、菅原自身への気遣いも大きかった。お互い気遣っていた。そのような気遣いが昂じてストレスとなってしまった。今となってみれば、「けんかすりゃよかったかも」と反省する。

互いに対する気遣いは、予期せず同じ時期にピークに達する。どういう話に持っていこうかと、それまでの間、2人はそれぞれ考えていた。別居という選択肢もあった。だが、菅原は、別居は中途半端だと考えた。そして、互いに笑いながら、「離婚しよか」という結論となった。

家族の状況に関して、もうひとつの変化が訪れる。ほぼ同じ時期、父親の認知症が進行し、目の前の人是谁か分からないほどになった。さらに、手足も不自由になった。

D社は菅原に休職を勧めた。だが、菅原自身は「親孝行しようかな」と考え、D社に退職届を出して父（および母）の介護に専念することに決めた。当時、菅原は金銭的に特に苦勞していなかった。このため、経済的な見通しはそれほど気にならなかった。そのことよりも、父親の介護のことで頭がいっぱいであった。だが、退職の9ヵ月後、父親は亡くなる。さらに、その翌月、今度は姉の夫、つまり菅原の義理の兄がすい臓がんで亡くなる。そこで、姉が実家に住まいを移し、母と2人暮らしを始める。菅原は、家を出て、再就職先を探すことになる。これまでの実績を買われ、菅原は、D社から復職の話を持ちかけられる。しかし、菅原自身に、復職する考えはなかった。

その約1年後のある日、菅原は、新聞で、愛知県の手自動車会社による期間工募集案内を見つける。

4 大手自動車会社勤務時代

4-1 愛知県へ

菅原は、新聞で見つけた期間工の職にすぐに応募し、採用された。契約期間は、2007年11月から2008年5月までの半年間である。契約期間は長くはなかったが、菅原にとくに不安はなかった。住まいは、会社が提供する寮である。寮は市街地にある。菅原は、そこから毎日、20km離れた工場に通うこととなった。

寮は、約30棟が建ち並び、各棟は5階建てである。間取りは3LDK。これを3人の労働者で住む。一部屋ずつ鍵がかかるようになっている。菅原が入寮したとき、この3LDKに、菅原も含めて3人が入居した。しかし、入寮翌日、労働の過酷さからか、他の2人はすぐに仕事を止め、寮をあとにした⁽¹³⁾。そのため、菅原は、3LDKの間取りでひとりとなった。

4-2 工場内での相互作用

菅原は、自動車の組立ラインのうち、サイドボディを取り付ける部署に配属された。組立ラインとは、ベルトコンベアで次々と流れてくるパーツに新たなパーツをつけたりパーツのつきぐらいを確認したり調整したりする生産システムである。ベルトコンベアはそれなりの速さで動いている。この流れに慣れるにはそれなりの技術、経験、勘が必要とされる。しかし、工場の技術職経験のある菅原がこれに慣れるまでにそれほど時間はかからなかった。筆者は、組立ラインに日系外国人がいたかどうか聞いてみた。すると、自動車工場の事情に詳しい、派遣村の「先輩」であり、途中から筆者による聞き取りに同席していた津田（仮名：後述）が、「本社直営工場に日系外国人はいない」と説明してくれた。つまり、工場は、直営かそうでないかによっても、労働者の層が全く異なり、菅原は、同じ自動車の組み立てでも、比較的上層の労働者に属していたことを意味する。組立ラインには女性労働者もいたが、仕事の厳しさに男女の違いはなかった。組立ラインのうち、自分の配属部署の仕事が少しでも遅れると、ラインの次の部署に「待ち」を出してしまう。全体の作業に配慮をしながら正確に作業をこなしていけないといけいない。そこで、どうしてもトイレに行きたくなったときは、傍らにあるボタンを押し、ライン外で待機している人とすばやく代わってもらい、流れを止めないようにした。

工場敷地には喫煙所がある。そこでは、同じラインや別のラインの労働者が互いに会話

⁽¹³⁾ その工場は、(あくまでも) ネット上や口伝では、「刑務所」「収容所」などと表現されることもある。ただし菅原にとって、そこまで抑圧された場所とは考えなかったようである。忍耐力だけでなく種々の資質が、菅原には備わっていたように見える。

を交わし休憩をとる。すべての人が煙草を吸うわけではない。上司が煙草を吸わないことにあわせて、やめようとする人もいた。

喫煙所には、正社員も、派遣労働者も、菅原のような期間工も集まる。このような休憩の時間にしか互いに話す機会はない。そこで交わされる話題は、あまり込み入った仕事の話題やプライベートに立ち入る話題は避けられた。工場内における「期間工」「派遣」「正社員」といった雇用体系にかかわる話もされない。同じ期間工や派遣労働者などが、不安定な自分たちの雇用の形態についてぐちにこぼすようなこともあまりない。菅原によれば、この工場に限らず、職場では、一般に「政治と宗教のことは聞くべきでない」という暗黙の了解がある。したがって、交わされる話題といえば、休みは何をしているのか、機械の操作でやりにくいところはあるか、暑い水分補給はきちんとしているか、といった類のことである。パチンコなど賭け事の話もよく話題にのぼった。菅原自身は、賭け事はまったくしないので、話をあわせるくらいであった。

菅原は、愛知の慣れない地で、とにかく一生懸命働いた。しかし、2008年9月のある日、「契約満了」により退社を通告する旨の書類を受け取る。

4-3 「契約満了」にともなう退社と退寮

菅原が期間工として入社したのは、2007年11月、6ヶ月契約だった。つまり、2008年5月までである。その後、契約更新は6ヶ月おきに行われた。それが、ある時から、3ヶ月おきの契約更新に変わった。ところが、なぜか、2008年5月の契約更新時、渡された契約書には、契約期限は「2008年10月13日まで」となっていた。つまり約6ヶ月間の契約期間となっていた。菅原は、「3ヶ月契約から、また6ヶ月契約に戻ったのかな」と思った。実際、2008年9月初旬には、会社側から菅原に対して更新するかどうかの打診があった。菅原は、延長の意向を伝えた。しかし、意向を伝えて数週間もたたない2008年9月中旬、「契約満了にともなう、退社の通告書」が菅原のもとに届く。通常、契約期間が1年以上の場合、雇用保険が適用される。しかし、実際には1年以上の勤務実績があっても、菅原は短期間契約を更新する、いわゆる「細切れ」契約を結ばされていたため、雇用保険の適用外となる。だが、このときの菅原は自らが保険適用外であるということも知らなかった。

通告書を受け取って菅原が退社したのは、その1ヶ月後の2008年10月中旬である。会社は、会社規則により、退社日から3日以内に寮を引き払うよう、菅原に通知した。もっとも、こうした規則は、現実には法的拘束力はなく、次の仕事が見つかるなど、生活の目処がたつまでの間、寮にとどまることはできる。だが、そうしたことを当時の菅原は知るよ

しもなかった⁽¹⁴⁾。無職で退寮すると、次の住まいを見つけることはきわめて難しい。なぜなら、アパートを探し、入居する際には家賃の支払い能力、すなわち、収入の見込みを大家に示すことが必要になる。一方、求職活動は、住所不定では、事実上、無理である。採用までの間、会社と連絡もとれないし、なによりも、生活が安定していない人を会社は雇いたがらない。つまり、仕事と住まいを同時に失うと、仕事も、住まいも、どちらも見つけることが難しくなる。菅原は、まさにその二重苦の状態に突然、陥ることになったのである。

退寮すると、炊飯器・掃除機・ポット・衣装ケースなどの家財道具、スーツ・普段着・下着などの衣類を保管しておく場所がなくなる。掃除機などを抱えて持ち歩くわけにはいかない。菅原には、そのような状況を理解し助けてくれる人がいた。勤めていた自動車工場のある社員が、菅原に声をかけ、「宿泊先を提供することはできないが、家財道具などの置き場所として使ってくれていい」と、自宅の納屋を一時的に提供してくれたのである。

退社と退寮を強いられて、ホームレスとなることを余儀なくされた人々の多くは、自分が持っている家財道具を手放して捨ててしまうことになる。菅原の推測では、それは7、8割の人がそうせざるをえない。家財道具を捨てるということは、置き場所を提供してくれる人がいないなど、その人に社会関係資本がないことを意味する。家財道具などを一切失うと、後日居宅を得る段階に至ったとき、生活再建にかなりのコストがかかる。菅原の場合、家財道具等の置き場所を提供してくれる人がいたので、「ある意味で、運がよかった」。このことは、また、路上生活を送る上でも大きな利点となった。自動車会社の期間工として働いていたとき、菅原は、礼服を含めたスーツ6着、スラックス7本、ネクタイ10本を持っていた。また、日常の着替えの服も持っていた。このため、「他のホームレスよりも、身なりはきちんとしていた」のだ⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。この時、社員も菅原自身も、置き場所が必要なのは一時的なことであって、住まいも就職先もすぐに見つかると思っていた。しかし、その考えは甘かった。

⁽¹⁴⁾ 菅原の支払っていた寮費は、借家を使う対価として支払われる家賃とは考えられないために、会社は半年以上前に明け渡しを申し入れなければならないという借地借家法の規定の適用はない。しかし、最高裁の判例では、明渡し期間について、半年の明渡しの猶予期間を基準とすべきであるとしており、この基準によって「すぐに退寮する必要はない」と言われている。

⁽¹⁵⁾ この言葉は、しばしば言及されるような、他の路上生活者との「差異化 (distinction)」を図ろうとすることを表すものではない。

⁽¹⁶⁾ 路上生活時代、炊き出しに並んでいたものの、用意されていた炊き出しの量が十分でなかったとき、ボランティアが「あ、おじさんは違うね」と言って、炊き出しの食事を提供してもらえなかったこともあるという。このため、「もう少し汚い恰好をしたほうがいいのか」も考えたという。E・ゴフマンも『日常生活における自己呈示』におけるパフォーマンス論で指摘していた「逆方向への理想化 (negative idealization)」である (Goffman 1959: 40 = 1974: 45)。

5 ホームレス時代——ホテル生活から路上への「転落」・生活解体

5-1 ビジネスホテル・ネットカフェでの生活

親切な社員の納屋に自分の荷物は置かせてもらえたが、菅原自身の身の置き場所はなかった。そこで、「一時的な」宿泊先を探した。そのころ、関西から愛知県にやってきて、すでに1年近くの時間が経っていた。しかし、周辺地理についてあまり詳しくない。大手自動車会社工場勤務時も、ほとんど寄り道をすることもなく寮と工場を行き来していたからである。そのため、一からよさそうな宿泊先を探すことになった。当時、菅原は、宿泊先といっても、新たな居宅が見つかるまでの一時的なものであり、入居までの期間も長くとも1ヶ月くらいと踏んでいた。所持金には限りがあるために、なるべく安いところがよい。だが、「おかしげなところに泊まるのはイヤ」である。そこで、業種別電話帳冊子『タウンページ』を使って、安いが「怪しく」なさそうな宿泊先を探した。

ビジネスホテルは宿泊料金が6000円以上のところも多い。だが、よく探してみれば、1泊4500円から5000円くらいのところも結構あった。そこで、1泊5000円のビジネスホテルを選んだ。実は、5泊以上する場合、割引料金が適用される。そこで、菅原は最初、5日単位で、1泊4000円で宿泊していた。しかし、就職活動も難航し、滞在も長期化し、金銭的に苦しくなってきた時、ホテルと個別に交渉、実際には拝み倒して、1泊2500円で泊めてもらえることになった。

だが、困ったことに、そのホテルは年末年始が休業であった。12月26日から翌年の1月5日まで、そのホテルに立ち入ることはできなかった。菅原はそこで、「一時的な」路上生活を経験することになる。菅原の父は、北海道網走市番外地という極寒の地の育ちだが、菅原自身は、比較的暖かい本州関西の育ちである。寒空の季節の中、駅の構内で寝泊りをした。警備員に注意されるか気になりはしたが、とくに呼び止められることはなかった。このとき、ちょっとした食事をするくらいのお金は持っていた。

路上で5日間を過ごしたが、年末の12月31日、「日本人」らしく、「紅白歌合戦が見たいなあ」と思った。そこで、大晦日の12月31日から、正月の1月1日、2日、3日の4日間は、駅近くのマンガ喫茶（インターネットカフェ）に泊まった。正月明けの4日、5日はまた駅で寝泊りをした。そして、6日にはビジネスホテルが営業再開。菅原は、元のホテルに舞い戻った。そこでしばらくは生活をしていた。

しかし、まもなく、資金が底を尽きた。2009年2月のある日、菅原は文字通り、路上に放り出された。

5-2 路上生活者への「転落」

菅原はこのとき、初めて人生のどん底を経験することになる⁽¹⁷⁾。主な生活の場は、駅前広場およびX公園になった。



(写真2) X公園

菅原が相談した派遣村相談会も、この公園でおこなわれた。

路上生活初心者の菅原にとって、最初はとくに「難儀」することが多かった。着ている衣服が汚れていくこともそのひとつである。何日も同じ服を着ていると、服にだんだんと汗と汚れが染み付いてくる。汚れたままの服は、低い外気温と相まって、いっそう体温を下げ、体調を悪くする。

ただし、菅原の場合、前述のように、持ち物を置いておく場所を提供してもらっていたため、衣服を洗濯して取り替えることができた。靴下、ズボン、下着、シャツなどは、公園の障がい者用のトイレの洗面所で洗った。洗面所は、水の出しっぱなしができない、プッシュ式の水道であった。洗濯粉は、溶け残るので、石鹸を使用した。

洗濯物は、公園内の正面にある、少し高台になっているステージの鉄柵部分にかけて並べて干した。公園では別の路上生活者たちも生活していたが、その鉄柵に関しては、菅原以外の人々が使用することはなかった。というのは、ステージの鉄柵部分は少し高台になっており、菅原のように身のこなしの軽い者でなくては、洗濯物を干すには不都合であっ

⁽¹⁷⁾ インタビュー時、筆者は菅原に、質的社会調査におけるライフコース研究のひとつの方法として知られる、「人生地図」(生活満足度)を描いてほしいとお願いをした(Clausen 1995: 137)。菅原は描くことを断ったが、あえて書くならば、波の変動はあまりなく、10段階のうち6くらいを水平に描くが、路上生活時だけは、急落したのだという。

たためである。



(写真3) 公園のステージと鉄柵の写真

ここで菅原は筆者に洗濯物の干し方を実演してくれた。

こうして、菅原は、毎日のほとんどをX公園や駅前広場ですごしていた。だが、路上生活が長引くにつれ、だんだんと気分が落ち込むようになってきた。関西ではD社という名の通った企業にも勤めており、それなりの地位・役職にもついていた。それなのに、どうして今、こんなことをしているのか、なぜこんな風になってしまったのだろうかと思自暴自棄に陥り、むしろ死んでしまいたいとも考えていた。

5-3 資質をあらわすエピソード

そんな路上生活時代のエピソードはいくつかある。

ある日のこと、菅原は、いつものように朝からX公園に行き、公園の洗面所で、靴下やズボン、下着などの洗濯をしていた。そして公園内の正面にある、少し高台になったステージの鉄柵部分に洗濯物を干していた時、30代半ばくらいの男性が、穏やかな顔つきで菅原に近づいてきた。その男性は、菅原に「この公園で寝泊まりしているの？この生活はもう長いのですか？」とたずねてきた。それをきっかけに、菅原はステージ上に昇ったままの状態、2人でいろいろな話をした。別れ際、男性は「オジサン、死んではダメですよ」といった。その言葉に、菅原は自分の心中を見透かされているような思いがした。菅原は再び、洗濯物を干し始めた。すると、下からその男性は、「これ少ないし、1食分しか無いけれど」と言って、物干しをしている菅原のズボンの後ポケットにチャリン、と小銭を入れた。菅原は丁寧に礼を言うと、男性は微笑みながら、去っていった。物干し作業が終わって、高台のステージから降りて、ポケットのなかを探ると、なんと1000円札が入って

いた。小銭と合わせると、1590円入っていた。これは、1食分どころか、路上生活者の菅原にとって、10食分以上に値する金額である⁽¹⁸⁾。驚いて、ふと男性が去っていった方向を見ると、公園近くの交差点で信号待ちをしている姿が見えた。大声で、「お兄さん！」と呼ぶと、男性は振り返ったので、再度、「ありがとう」と言って、深々とおじぎをすると、同じように男性もおじぎをして去っていった。

その後、菅原はベンチに座り、少し眠りながら洗濯物が乾くのを待った。午後3時半ごろ、起きだしてステージに昇り、乾き具合を見ていると、ステージとは正反対の方向から、自転車に乗った60歳くらいの「ご婦人」が、菅原のほうに向かって近づいてきた。そして菅原との距離5mくらいのところで自転車に乗ったまま止めて、じっと「苦虫を噛みつぶしたような、おっかない形相」で、5分くらいじっと見ていた。こんなところで洗濯物を干しているので、お叱りを受けるのかな、と思いながら、気がつかないフリをして、洗濯物を取り入れていた。すると、その婦人が、自転車から降りて、歩いて菅原の元に近づいてきた。あいかわらず形相はかわらず、厳しい表情だった。そして菅原の足元近くで立ち止まると、ステージ上の菅原の足元に500円玉を1枚置いて、「ガンバリ！」と言残して、菅原がお礼を述べる間もなく、自転車のほうに戻っていった。ステージ上から、「ありがとうございます。ガンバリます！」と言っても、とくに反応も無く、無表情で自転車に乗って去っていった。菅原がステージ上から降りて、婦人が去っていくのを目で追っていると、今度は、婦人の方から菅原のほうを見て手を振った。菅原は、婦人の姿が見えなくなるまで、おじぎをしていた。

当時、菅原はさまざまな迷いや葛藤で自暴自棄に陥り、死までも考えていた。そんななか、男性や「ご婦人」の言葉が「胸につきささり、目から鱗が落ち（誤りを悟り迷いから覚める、という元来の意）、再度自分自身を見つめなおすことができた」と回顧する。

路上で生活している人々のなかでも、なかなかこのようなちょっとした援助を受けることのできる人は少ない。しかし菅原には、たとえ路上に「転落」しても、手を差し伸べる人物が現れる。しかも、菅原は、そのような人物の存在を、心の支えとするだけの気力を持ちえていたのだ。

⁽¹⁸⁾ X公園からほど近い、あるうどん屋の「かけうどん」は、一杯105円である。温かいものが食べられるということで、路上生活時代、菅原はこのうどん屋を重宝した。

5-4 「家出少女」との出会い——慕われる資質

また、こんなこともあった。生活の再組織化に志向するのに役立つ、菅原の相互作用上の資質や能力をあらわすエピソードである。

3月のある日、日々の暮らしを送っていたX公園で、路上生活者同士のちょっとした衝突から、「イヤな空気」が流れた。そこで、場所を変えて、X公園から徒歩10分くらいの場所にあるY公園へ歩いて行った。朝の8時ごろである。そこで、ある「女の子」を見かけた。その女の子は、パンか何かを食べていたのだが、それをボロボロとこぼしていたために、下に落ちた「食べかす」を食べに来るハトの大群に襲われていた。そこで、菅原は、ハトを追っ払ってやった。その女の子は、「リコ」（仮名）と名乗った。聞いてみれば、当時春休み中で、新年度から中学3年生になるということだった。両親は離婚し、父と2人で暮らしているのだが、受験やその他のストレスもあり、父親とけんかをし、家を出てきたのだという。菅原とリコ。世代はまったく異なるが、2人とも居場所のない者同士である。学校のこと、部活のこと、家庭のことなど、菅原は、リコといろいろな話をした。彼女は話の途中で、「オジサンはなんて名前？」と尋ねてきた。「あー、仲間うちではスガさんで通ってるけどなあ」と答えると、少々驚いた様子で、「え？なんて名前？」と再び尋ねてきた。「菅原」、そう告げると、彼女は、少々はにかんだ様子で、自分の名前が書かれた生徒手帳を出して菅原に見せた。なんと、同じ「菅原」の姓であった。

それがきっかけとなって、菅原と「菅原リコ」との会話はさらに弾んだ。彼女は、将来、アニメ関係の仕事がしたいと考えていた。その関係で、美術や書道に関心があった。その日、Z市の美術館で書道の無料展示会があったので、2人で一緒に行くこととなった。美術館では、この字はこういうふうに読むんだよ、などいろいろなことを教えたりしながら、楽しく2人で書道を展覧した⁽¹⁹⁾。まさか彼女は、自分が路上生活者だとは、夢にも思っていなかっただろうと、菅原は語る。

美術館からの帰り、道端でリコは急に立ち止まった。「オジサン、ちょっと待ってて」と言って、急に走り出した。トイレにでも行くのかと思ったら、リコが走っていったのは、地元で人気の回転焼き（今川焼き・大判焼き）の店であった。いつも客の列ができていたので、菅原もいつも気になっていた店であったが、1つ40円も出すのはもったいないと思い、買ったことはなかった。リコは、回転焼き4つを抱えて菅原のほうに走って帰ってき

⁽¹⁹⁾ これには、菅原の尊敬する兄が、幼少期に書道教室に通っており、菅原も時折、出入りしていたことが背景にあるようにも思われる。菅原の定位家族には、教養を重視する雰囲気があり、それが一定の文化資本となっていたように思われる。

た。「オジサン、今日はいろいろと教えてもらったから、お礼にあげる」と言って、2つを菅原の前に差し出した。「ありがとう、ありがとう」と菅原は言いながら、1つを口いっぱいにはおぼった。もう1つは、食べたフリをして、そっと自分のカバンにしまった。それは路上生活者にとって、一気に食べてしまうのがもったいないから……と考えたわけではなくて、同じく路上生活仲間の「とっつぁんにやろうと思った」。

楽しい時間を終え、彼女との別れ際に、父親とどのように接したらよいかなどについてアドバイスした。何でもないようなことでもよいので、父親との会話の時間は極力多くすることを勧めた。当初、彼女はその日は家に帰らずに外泊するつもりだった。しかし、当日の別れ際に、「無断外泊なんてしないで、きちんと家に帰ります」と約束してくれた⁽²⁰⁾。このとき菅原は路上生活者。誰に断ったというわけでもなく、ある意味で「外泊」を続けるしかない身である。この境遇に、菅原は心の中で苦笑した。

6 「派遣村」活動との出会い——生活の再組織化へ向かって

6-1 きっかけと「流れ」

前節の家出少女との出会いのエピソードは、本稿の関心からすれば、菅原の相互作用上の資質と能力を示している。その後も菅原は、ハローワークに通ったり、就職情報誌を活用したりしながら、就職活動を続けていた。しかし世間の風は冷たい。電話で問い合わせをした時点で即断られたり、面接の機会を得ても、住所が定まっていない、連絡先もない、というような理由で断られたりした。正社員どころか、アルバイトさえ容易ではないことに気が付き、ますます気を落としていた。

しかしそんな折、ホームレス支援をおこなう民間団体から、X公園で「派遣村相談会」というものがおこなわれると聞いた。路上生活者の仲間内では、「相談会に行って、手伝いをすれば、何か食べ物もらえるらしい」という話になっていた。

相談会当日、早朝からX公園に足を運んだ。そこでは、何か食べ物をもらえることを期待して、というわけでもなかったが、会場の設営にも協力した。ビラ配りも手伝った。相談会は、10時ごろから始まった。だが、その時、菅原は相談しようかどうかと躊躇していた。しかし、相談を終えた人びとが、笑顔で帰っていったり、お互いに談笑してい

⁽²⁰⁾ この節では便宜的に「家出少女」という表現を用いたが、菅原リコには無断外泊の経験は一度もなく、この日も、菅原のおかげもあってか外泊することを免れた。

たりするのを見て、自分も相談してみることを決めた。

住居のこと、生活のこと、就職のことなど、困っていること、悩んでいること、希望することなどを「相談員」にすべて話した。その結果、菅原が驚いたことに、当日のうちに住居が決まった。住所を定めて、当面は生活保護を受けながら、就職活動する方針が導かれた。

数日後、支援するボランティアの有識者に同行してもらい、福祉事務所へ生活保護の申請をした。その時、社会福祉協議会（社協）から、一時貸付金として、2万円を貸与された（1万5千円という人も多いが、菅原には2万円が貸与された）。7月には、6月分と7月分から一時貸付金の分を引いた分が、まとめて菅原に支給された。

生活保護については、近年、「濫給」（必要のない人に支給されること）よりも「漏給」（必要な人にいきわたらないこと）が問題となりつつある。だが、それでも、いまだステイグマ性がつきまとう。菅原も、周囲からは、「まだ働けるのに、50代で生活保護なんて……」というような非難や中傷の声を聞く。無論、菅原自身も、早く就職して生活保護を断って自活したいのに、就職はなかなか決まらずに焦っているとき、そのような非難や中傷の声が聞こえてくる。そんなとき、常日頃から親身になって相談に応じ、かつ緊密な関係を築いている津田から、焦る必要はないという激励を受ける。焦って仕事を見つける必要はない、菅原は福祉関係の仕事が向いていると思うので、資格取得するのでもいいかもしれない、などというアドバイスを受ける。実際に、福祉関係の仕事にかかわる気があるかどうか、菅原自身も分からない。だが菅原は、どこか開き直ったようなすがすがしい気持ちになった。焦る気持ちがなくなると同時に、いまだ模索中ではあるものの、今後の自分の目標や進むべき道を見つけたような気がした。

6-2 菅原の資質と社会関係資本

以上、菅原の生活史をみてきた。菅原の生活史は、Ⅰ 関西地方での生活期、Ⅱ 大手自動車会社勤務期、Ⅲ 仕事・住居喪失期、Ⅳ 派遣村活動への参画期、の4つの時期に分けられる。このなかで、彼にとって最も深刻な時期、すなわち、危機の時期はⅢ期（生活の解体）であるが、その後、様々な出会いや出来事を経て、Ⅳ期に移行する（生活の再組織化）。では、こうした生活のプロセスのなかで、菅原は周囲の人とどのような人間関係を築いていたのか。上の生活史でもうかがえるところではあるが、ここでは、改めて、彼の生活史を、主にⅢ・Ⅳ期に焦点をあわせつつ、彼の持つ資質や社会関係資本の観点から4点ふりかえっておきたい。

第1は、家族についてである。離婚したとはいえ、彼には、精神的なよりどころとしての家族があった。現在、「派遣切り」の問題で明らかになりつつあるのは、多くの人々にとって、自分の経済的、精神的なよりどころとなる故郷・ホームを持ちにくい時代が来ているということである。そうした故郷・ホームのない人々が現在、路上にあふれている。菅原の場合、経済的なよりどころはなかったが、精神的なよりどころがある。実際、彼は、いつか復縁もあるかもしれない、という希望を持っているし、子どもの存在を心の支えとしている。

第2は、友人関係についてである。菅原には、Ⅲ期という危機的状況下においても、もらった回転焼きを大事に残して手渡す「とつつあん」という友人がいた。そして、現在も、この友人とつながりがある。路上生活から抜け出し、生活保護を受けてアパート暮らしをするようになると、路上生活で築いた人間関係が切れて、孤独になってしまう、ということがよくある。だが菅原の場合は、つらいときにも仲間がおり、また、その仲間とは、今もこのつらいときを共有できる関係にある。菅原は、とつつあんのことを本当に楽しそうに語る。実は、とつつあんも、菅原と同じように、派遣村相談会に来訪し、菅原と同じアパートに住んでいる。そして、とつつあんとは毎日、他愛もない話をする。ある日、隣のアパートに好みのタイプの女性が住んでいることにとつつあんは気づき、どうやったら彼女に名刺を渡すことができるか、菅原に真剣に相談している。また、とつつあんには喘息の持病がある。ある日、ひどい発作が出たとき、菅原があわてて病院に連れて行った。だが、「病院の受付に綺麗な女の子がいるのを見つけたとたんに治った」という。このように、とつつあんとの関係は、現在、単調になりがちな菅原の生活のアクセントとなっているだけでなく、誰かに頼り、頼られている、という感覚が菅原にとっておそらくは「太陽にはじめ生活」を支える基盤となっている。

第3は、メンター（導き手）の存在である。つまり、菅原の場合、津田がこれにあたる。菅原は津田に「引きずりこまれ」、さまざまなことを学んでいる。菅原たちは（本稿執筆時）、市民センターの一角で、毎週相談会を実施している。菅原には、法律の専門知識はない。そのため、法的な相談に乗ることはできないが、自分もいわば「当事者」として、自分の経験を生かして、「貧困」にあえぐ相談者の生活の立て直しに向けた援助を続けている。たとえば、相談にやってきた人と雑談をして緊張を解いたり、アンケートや履歴書などの書類の書き方の補助をおこなっている。津田には、こうした活動の助言だけでなく、将来の見通しをも与えてもらっている。津田には、現状にあせる必要はなく、福祉関係の資格をとることをすすめられている。それだけでなく、彼との活動を通じて、新たな関係の構築も促進された。たとえば、市役所の「職員さん」と顔なじみになったというのも、

菅原の生活の立て直しに良い影響を与えている。あらゆる出会いのなかでも、それが一番重要かもしれない、と菅原は話す。菅原は、「貧困」など同じような境遇にある人々が、スムーズに生活保護を受けられるようにするため、さまざまな支援活動をしている。たとえば、市役所地下のコピー室で、「住基カード」のコピーをとっていると、市役所職員は、「何している人かな」という目で菅原をみる。そこで、菅原は、津田が作成してくれた「派遣村実行委員会」の名刺を渡す。すると、そこから、会話が始まる。菅原によれば、よくある役所の敵対的なイメージに反して、こちらのことをかなり親身になって考えてくれている面もあるのだという。そのことに菅原は感謝している。

第4は、こうした彼の人間関係を通してみえてくる彼の資質である。丁寧で丁寧なふるまいからうかがえる律儀さ（自分の生活史の整理、援助へのお礼）、人なつっこさ（「家出少女」との会話）、自分の失敗話をおもしろおかしく話せるユーモアの精神（好きだった女の子が別の高校に……）、などを初めとして、彼にはどこか人を誘引する力がある。現在の派遣村活動においても、たとえば先の津田は、一部の「上から目線の」高圧的な市役所職員に対して、かなりの異議申し立てをする。その一方、菅原は、職員に対して柔らかな態度で接する。そのような性格と態度もあって、菅原は役所の職員からも慕われているのだと津田は述べる。先に見た第1から第3の点は、多かれ少なかれ、いわば、この資質に引きつけられて構築された社会関係ともいえるのではないだろうか。

以上、菅原の資質・社会関係資本について、4つを見てきた。これらが複合して、彼は、今、アパートに住み、生活をしていることができています。しかし、逆にいえば、他の多くの仕事と住まいを失った労働者のうち、どれだけの人が、こうした社会関係や資質に恵まれているだろうか。こうした個人の社会関係や資質の有無に人生を託す社会がはたしてよいか、という議論も出てくるかもしれない。

7 まとめ

多くの路上生活経験者は、資本を再組織化して生活を立て直していくのに大きな困難をともなう。路上生活者のなかには、社会的活動に参画することはおろか、自身の援助を請うことも困難な人も多いと聞く。菅原の場合、パーソナリティ（思慮深さ、几帳面さ、人に対するやわらかい態度、など）、社会・文化資本（親戚や家族、助けてくれる元同僚、その他知人・友人など）、人的資源（知性、体力、心身の健康、料理の技能など）、会話資源（援助してくれる人を引き寄せる工場内での会話、「とつつあん」との会話、公園で出会った人々からの激励など種々の言葉、など自尊心・社会的絆を育むもの）が、派遣村活

動と出会ってから、社会圏を広範なものにし、弱い／強い社会的絆を形成するのに寄与した。派遣村活動は、結局、社会的絆・ネットワークの網の目のなかでの、菅原の社会的位置を多少なりとも確固としたものにし、援助を受ける／与えるなかで、生活の再組織化は促進された。

こうして考察を加えていくと、一つの命題が浮かび上がる。それは、くさまざまな資源を失ったり、その有効性が減退したなかで生活解体が起こっても、ある種の資質を有していれば、生活解体の程度が軽度ですんだり、その後の生活の再組織化が容易となりうる>ということである。たとえ生活危機におちいったとしても、過去に資質・資本・資源の蓄積がなされていれば、円滑で柔軟な生活の組織化が期待できる。初期シカゴ学派の家族研究者、たとえばキャバンやランク、あるいはフレイジアが、当時の大恐慌などで衝撃を受けた流動的な社会において、いかにして生活の再組織化がなされるか分析しようとしたことが、この命題からは思い起こされる（Cavan and Ranck 1938; 大山 2003, Frazier 1931, 1932; 西川 2008b, 2009）。彼・彼女らは、生活の再組織化のためには、家族の組織化が重要であると考えた。もちろん、家族は重要な「親密圏」であるが、生活の組織化にとって、家族にとどまらない広義での親密圏の再組織化と構築、さらには、それまでに蓄積された資質・資本・資源が、生活の立てなおしに大きく寄与する可能性がある。

流動化・不安定化した現代社会においては、誰しものが職や住まいを失う可能性がある。しかし、個々の条件に大きな違いはあれ、生活解体の状態に陥ったとしても、再組織化を容易にするための活動やトレーニングもまた、誰でもできる可能性がある。つまりそれは、日々の生活のなかで、各自および社会のレジリエンスを高めていく社会的行為・活動である。それらを容易にするためには、フォーマル／インフォーマルなレベルでの多元的な社会の仕組みづくりも必要となってくる。21世紀初頭の現代日本において「貧困」に対峙する菅原の事例は、そのことを示しているように思われる。

参考文献

- 愛知派遣村実行委員会・知立団地一日派遣村実行委員会・豊橋派遣村実行委員会, 2009, 「愛知県内におけるこれまでの「派遣村」活動」愛知派遣村交流集会資料（集計者: 大山小夜・西川知亨・近藤敬子）。
- Burgess, Ernest Watson, [1925]1967, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Report," Robert E. Park and Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: The University of Chicago Press, 47-62. (= [1965]1978, 奥田道大訳「都市の発展——調査計画序論」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房., = 1972, 大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会, 49-64.)
- Callens, Marc and Christophe Croux, 2009, "Poverty Dynamics in Europe: A Multilevel Recurrent Discrete-Time Hazard Analysis," *International Sociology*, 24 (3) : 368-96.

- Caputo, Richard K., 1997, "Escaping Poverty and Becoming Self-Sufficient," *Journal of Sociology and Social Welfare*, 24 (3) : 5-23.
- Cavan, Ruth Shonle and Katherine Howland Ranck, 1938, *The Family and the Depression: A Study of One Hundred Chicago Families*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Clausen, John A., 1995, *American Lives: Looking Back at the Children of the Great Depression*, Berkeley: University of California Press.
- Conwell, Chic and Edwin Sutherland, 1937, *The Professional Thief*, Chicago: The University of Chicago Press. (= 1986, 佐藤郁哉訳『詐欺師コンウェル』新曜社.)
- Frazier, Edward Franklin, 1931, "The Negro Family in Chicago," A Dissertation Submitted to the Graduate Faculty in Candidacy for the Degree of Doctor of Philosophy, Department of Sociology, University of Chicago.
- , 1932, *The Negro Family in Chicago*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Goffman, Erving Manual, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor. (= 1974, 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- 宝月誠, 2000, 「『物語的社会学』の原点——トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』第三部を中心に」『社会学史研究』22, 日本社会学史学会, 39-48.
- 鎌田慧, 1983, 『自動車絶望工場——ある季節工の手記』講談社.
- Keels, Micere, Greg J. Duncan, Stefanie Deluca, Ruby Mendenhall and James Rosenbaum, 2005, "Fifteens Years Later: Can Residential Mobility Programs Provide a Long-Term Escape from Neighborhood Segregation, Crime, and Poverty?," *Demography*, 42 (1) : 51-73.
- Krishna, Anirudh, 2004, "Escaping Poverty and Becoming Poor: Who Gains, Who Loses, and Why?," *World Development*, 32 (1) : 121-136.
- 厚生労働省, 2009, 「非正規労働者の雇止め等の状況について」(Press Release), 大臣官房統計情報部雇用統計課.
- <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000002nhe-img/2r98520000002niw.pdf> (2009年12月1日閲覧)
- 西川知亨, 2002, 「E. F. フレイジアの逸脱論」『京都社会学年報』10, 京都大学文学部社会学研究室, 167-87.
- , 2003a, 「初期シカゴ学派とE・F・フレイジア——人間生態学的方法の「極相」と「萌芽」」『ソシオロジ』48 (2), 社会学研究会, 91-107.
- , 2003b, 「フレイジア『シカゴの黒人家族』(一九三二)」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 135-42.
- , 2003c, 「初期シカゴ学派と人間生態学」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 263-4.
- , 2004, 「社会調査と人間生態学的方法——初期シカゴ学派におけるE・F・フレイジアを中心に」『社会学史研究』26, 日本社会学史学会, 129-43.
- , 2007a, 「E・W・バージェスと社会調査——「科学」の意味に注目して」『社会学史研究』29, 日本社会学史学会, 87-100.
- , 2007b, 「E・W・バージェスの社会政策論——社会改良・計画・福祉の展開」『現代社会研究』10, 京都女子大学現代社会学部, 105-17.
- , 2008a, 「E・W・バージェスの「人間」概念の社会性」『金城学院大学論集』(社会科学編) 4 (1), 金城学院大学, 54-69.
- , 2008b, 「初期シカゴ学派の人間生態学とその方法——E・W・バージェスとE・F・フレイジアを中心にして」京都大学博士(文学)学位論文.
- , 2009, 「シカゴ学派都市社会学のアジア「親密圏」分析への応用可能性——グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学」(GCOE ワーキングペーパー) 京都大学大学院文学研究科グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」.
- 大山小夜, 2003, 「キャバン&ランク『家族と大恐慌』(一九三八)」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 215-20.
- , 2009a, 「愛知にみる反貧困の草の根活動——2.22愛知派遣切り抗議大集会の経緯・内容・その後の動き」『消費者法ニュース』80, 142-3.
- , 2009b, 「基調報告：愛知における「派遣村」活動——岡崎・知立・豊橋」愛知派遣村交流集会(2009年7月26日於岡崎市勤労文化センター) .
- Shaw, Clifford R., [1930]1966, *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*, Chicago: The University

of Chicago Press. (=1998, 玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東洋館出版社.)
宇都宮健児・湯浅誠編, 2009, 『派遣村——何が問われているのか』岩波書店.

付記

本稿は、京都大学研究拠点形成費等補助金若手研究者研究活動経費（「地方都市における「貧困」に対する社会的組織化の研究——専門家集団／「当事者」による公共圏と親密圏の再編成」（研究代表者：西川知亭）次世代研究・京都大学GCOE拠点プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」, 2009年度）による研究成果のひとつである。

謝辞

本研究において、長時間にわたるインタビューに快く付き合ってくださったばかりでなく、生活史の事実関係の記述について丁寧にチェックしてくださった菅原健さんに厚く御礼を申し上げます。もちろん、本稿の内容に関する一切の責任はすべて筆者にあります。調査に協力くださった愛知派遣村実行委員会・知立団地一日派遣村実行委員会・豊橋派遣村実行委員会の皆様にも感謝します。また、社会学者として愛知県の「派遣村」活動の実践的調査を続けている大山小夜氏（金城学院大学）からは、いつもいろいろと有益なご教示をいただいています。記して感謝の意を表します。

（にしかわ ともゆき・研究員）

Disorganization and Reorganization of the Social Life in Regard of Contemporary Poverty Problems: Life History of a Consulter at a “Hakenmura” in Aichi Prefecture

Tomoyuki NISHIKAWA

Poverty in Japan has become quite a serious problem in recent years. A large population has lost their jobs and houses. In order to help such people, a so-called village named “Toshikoshi-Hakenmura”, which means *village for temporary workers to see the old year out*, was established in Tokyo in December 2008. It was well known for its social activities to fight poverty issues. However, “Toshikoshi-Hakenmura” did not last for long, and handed its objectives over to a new social activity, simply called “Hakenmura”, which then spread all over Japan.

Considering contemporary poverty problems, the present paper explores the process of disorganization and reorganization of the social life through interviews in Aichi Prefecture. I conducted in-depth life history interviews with a man who worked as both a consulter and a staff member in the “Hakenmura” planning committee in Aichi Prefecture. From the narrative of the informant, I managed to distinguish four stages in terms of his personality and social capitals. In the first stage, he worked as a “respectable” laborer and lived with his family in Kansai area. In the second stage, he lost his family and started a new life in Aichi Prefecture as a worker in a giant automobile company. In the third stage, he lost his job and house, and experienced “the bottom of his life” as a homeless. In the fourth stage, he encountered “Hakenmura” and attempted to rebuild his life by participating in its activities. The findings show that it is crucial to acquire preliminary social capitals or resources including a certain kind of personality as preconditions for reorganizing one’s life.

The findings suggest that if one loses his job and/or family, he would be able to rebuild his life not only by seeking new challenges but also using preliminary human and social capitals or resources. One can acquire necessary social capitals through training, and also by meeting various kinds of people before the unexpected disorganization of life would happen. The present study also indicates that our society in the twenty-first century urgently needs to create multiple social systems in order to support people on both formal and informal levels.